

平成17年度病害虫発生予察特殊報第2号

平成18年2月3日
鳥取県病害虫防除所

1 病害虫名 タバココナジラミ バイオタイプQ (*Bemisia tabaci* Q-biotype)

2 発生作物 ミニトマト

3 発生確認地域 県中部の一部地域

4 発生確認の経過

- (1) 平成17年8月から10月にかけて、県内のトマト、ミニトマト産地7地点の無加温施設栽培ほ場においてコナジラミ類の発生調査を実施した。その結果、10月下旬に県中部の4ほ場でタバココナジラミの発生がみられた。本虫を採取し、独立行政法人野菜茶業研究所に遺伝子解析を依頼した結果、タバココナジラミ バイオタイプQであることが判明した。
- (2) 発生ほ場は同一地域に集中しており、広範囲へは拡散していない。なお、トマト黄化葉巻病の症状は認められなかった。
- (3) 国内では、本県の他に九州を中心に10県で発生が報告されている。

5 形態および生態

- (1) タバココナジラミには、遺伝子の異なる41の系統(バイオタイプ)が存在し、国内では、在来系統(バイオタイプ不明)、シルバーリーフコナジラミ(バイオタイプB)、バイオタイプQが確認されている。
- (2) バイオタイプQはスペイン、中国、イタリアなどで発生しているが、生態に関しては不明な点が多い。また、シルバーリーフコナジラミ(タバココナジラミ バイオタイプB)との形態上の差異は確認されていない。
- (3) 他県での薬剤感受性試験の結果から、シルバーリーフコナジラミと比較して、ピリプロキシフェン剤や一部のネオニコチノイド系剤に対する抵抗性が高いことが報告されている。
- (4) 他県では、ナス科、ウリ科など多くの野菜、花卉等への寄生が報告されている。
- (5) シルバーリーフコナジラミと同様に、トマト黄化葉巻ウイルス(TYLCV)を媒介することが確認されている。

6 農作物への被害

トマト黄化葉巻ウイルス(TYLCV)の媒介により、トマト、ミニトマトに葉巻、萎縮、着果不良などの症状を引き起こす。また、多発すると、吸汁による果実や葉の白化症状や、排泄物によるすす病も問題となる。

7 防除対策

- (1) 生産地が明らかな苗を使用し、ウイルス病の発生に注意するとともにコナジラミ類の寄生が疑われる苗は使用しない。
- (2) 増殖源となる、ほ場周辺の雑草類の除去を徹底する。
- (3) 施設の出入口やハウスサイドなどの開口部には、できるだけ目の細かい(0.4mm程度が望ましい)防虫ネットを張って、外部からのコナジラミ類の侵入を防ぐ。
- (4) 各薬剤の防除効果に注意し、コナジラミ類の薬剤抵抗性が疑われる場合は、すぐに病害虫防除所または各指導機関に連絡する。
- (5) なお、他県の薬剤感受性試験によると、ニテンピラム、ジノテフラン、ピリダベンを成分とする薬剤の効果が高いことが報告されている。(表参照)
- (6) 収穫が終わったら、全ての株を地際から切断したうえで、ハウスを閉め切って10日以上蒸し込み、圃場内のコナジラミ類を死滅させる。

表 タバココナジラミ バイオタイプQに効果が期待できるとされる主な防除薬剤

| 薬剤名 | 成分 | 希釈倍数 使用量 / 10a | 使用時期 | 使用回数 | 対象作物 |
|--------------------|--------|-------------------|-----------|------|-----------|
| ベストガード粒剤 | ニテンピラム | 1 ~ 2 g / 株 | 定植時 | 1回 | トマト、ミニトマト |
| | | 5 g / 培土1坪 | は種時又は鉢上げ時 | | |
| ベストガード水溶剤 | ニテンピラム | 1000 ~ 2000 倍 | 収穫前日まで | 3回 | トマト、ミニトマト |
| アルバリン / スタークル粒剤 | ジノテフラン | 1 g / 株 | 育苗期 | 1回 | トマト、ミニトマト |
| | | | 定植時 | | |
| アルバリン / スタークル顆粒水溶剤 | ジノテフラン | 3000 倍 | 収穫前日まで | 2回 | トマト、ミニトマト |
| サンマイトフロアブル | ピリダベン | 1000 ~ 1500 倍 | 収穫前日まで | 2回 | トマト |

(注) 対象病害虫は「コナジラミ類」